

林業技術センター
普及班便り
(第16回)

あなたの山づくりを応援する林業普及 いわての林業経営者【その6】 ◆自分は『木虫』！夢は山ぶどうワイン

一 はじめに

今回は、山ぶどう栽培の世話役として活動している奥州市衣川区「外の沢高原組合」事務局長の石川利巳さん（66歳）を紹介します。



石川利巳さん

二 私は「炭焼き子」の子
(1) 生まれは川井村

衣川区に住む石川さんは、開拓で入植した父の後を継いで二代目。この地に移り住んだのが、昭和24年小学2年生の時。それまでは県北で炭の「焼き子」をしていた父と炭焼き窯のすぐ側に建っていた仮住宅での生活だったそうです。川井村小国で小学校に入学しましたが、その地で生活は、それなりに楽しかったと、当時をふり返る石川さん。少年の頃、

山野を駆けめぐった思い出がよみがえったのか、時折目を潤ませ、心なしか言葉をつまらせながら、「木炭王国いわて」の良き時代を思い出しながら話していました。



栽培圃を指差す山中さん

(2) 木こりの父と「木虫」！

父は、林地の開拓や農業、炭焼の傍ら、地域の木材会社の「木こり」・「馬搬」作業の日雇いとして勤めていたそうです。そんな父の姿を中学卒業まで見て育った石川さんは、何

の迷いもなく家業の手伝いの道に飛び込んだとのこと。「朝から晩まで身を粉にして働いたもんだ」と話していました。体に染み付いた仕事なので、炭焼は止められないと今でも続けているそうです。

伐採や搬出で生活をしてきた自分を、「木を食って（切って）育ってきたので『木虫』だね」と自称していました。

三 山ぶどう栽培

(1) 地域の信望の厚い世話人

訳あって、農政の中山間振興関連事業の事務局長として、地域おこしの一環で山ぶどう栽培に取組むこととなりました。平成17年の春植栽から今年で丸3年、本格的な収穫を迎え、「嬉しい」日々とのことでした。

(2) まずはジュースに

全体（共同・個人）計画1haの内、すでに70aを植栽済みで、今年秋から本格的な収穫が始まり、150kgの収穫を見込むようになりました。収穫後の販路については、平成18年から、振興局や林業技術センターの指導を受け、着々と準備を重ねてきました。今年、陸前高田市のジュース加工メーカーの協力を得て250本（633cc入り）の商品化にこぎつけました。今年が初物なので、組合員に分ける予定だそうです。

(3) 『夢は山ぶどうワイン』を

今回はジュースにしましたが、目標面積の1haでの生産が軌道に乗った時には、『山ぶどうワイン』にすることが組合員全員の『夢』。組合員が子や孫への「お土産」にしたいと、『夢』を実現することを楽しみに、家業の忙しい中世話役に取組む山中さんでした。



本格収穫の房を手に



この孫達のお土産に

林業技術センター 普及班